

## 物資輸送と戦争

愛知県 鈴木照司

昭和十六年兵の現役兵として満州第二九八部隊（戦車十連隊）に入隊が決まり、昭和十七年三月二十日広島集合の通知がきておりましたが、十二月八日の宣戦布告後まもなく、変更の通知がきて、一月十日に中部第四十九部隊（戦車六連隊）に入隊しました。

しかし、我々は関東軍要員で、中部第四十九部隊へは一時預けられた形で兵舎も十分でなく、最低限の部屋にぎっしり詰めこまれました。三か月間教育を受け、やっと春らしい気候になりかけた頃、満州第二九八部隊から輸送指揮官が迎えにきて東安省東安へ向かいました。

宇品から貨物船に乗せられ釜山へ上陸、朝鮮經由の鉄道でしたが、我々の乗った列車は客車ではなく貨物列車でした。貨車に藁を敷き、そのうえにこもを敷いてごろ寝でした。一番困ったのが便所で、駅へ着く度に飛び降

りて用をすませました。

当時の軍用列車は機密保持のため時間が不定期で、長時間停車したかと思えば何時間も走りつづけ実にへいこうしました。やっと到着した東安は、いまだ厳寒の冬で、一面真っ白な銀世界、道路は凍結して氷のうえと同じで、皮ぞこの靴では危険で歩けませんでした。

ここで初年兵として各中隊班に配属され、本格的な教育が始まりました。ところが戦車隊は乗員の大部分が将校、下士官ばかりで、内務班の仕事が多く初年兵には非常な苦勞でした。下士官室へはこぶ食事の数や洗濯物も多いのです。演習、内務班、兵器、被服の手入れ等山ほどあり、勉強する時間等はなく、そのため消燈後便所の明りで教範を読むくらいで、それも週番下士官にでもみつかれば大目玉です。こんなことで体力がもつか非常に不安でしたが、なんとか私にもつとまり、さいわいにも甲種幹部候補生に採用されました。

幹部候補生の座がねをつけてからは、周囲の目が今までと違いすこしでも不注意なことがあれば下士官室へ呼ばれ大目玉です。ビンタの制裁もたびたびありました。

やがて秋になり甲種幹部候補生は戦車学校へ入校することになりました。しかし我々は普通一年で受ける教育を、わずか六か月で修了しなければなりませんので、毎日の訓練も想像を絶するものでありました。在校六か月その間一日も外出は許可されず、訓練・勉強の毎日でした。一番脳裏に残っていることは正月の三日、朝の点呼の集合が遅いとの理由で上半身裸で、気温零下二十度、雪の降るなかを二時間かけ足をさせられたことです。腕は血の気がなくなり、臘のような白い色にかわり感覚はありません。かわいたタオルで摩擦するとやがてすこしづつ赤身がでてきますが、その時の痛いこと言葉には現わせません。しかしこれをやらなければ凍傷になり、最悪の場合腕を切断するようなことになります。いろいろありましたがなんとか学校教育も終り、見習士官で原隊へ復帰しました。

昭和十八年十二月陸軍少尉に任官し、まもなく昭和十九年一月兵器行政本部付の命を受け、名古屋陸軍兵器補給廠豊橋分廠へ着任しました。内地もその頃からつぎつぎに状況がきびしくなり、とくに本土空襲が始まってか

らは色々と障害が起こりました。

私は輸送業務を担当していましたが、一番苦労したのは南方派遣部隊への補給兵器の輸送でした。行政本部から期日指定の発送証票が送られて来ますが、鉄道司令部へ申請して列車指定で貨車をとっても、積みこむ空車がないのです。到着貨車は駅に満車になっていても、人手不足と小運送具の不足でどうにもならなかったのです。なんとか貨車をあけさせ、指定列車に積みこまないと部隊の乗船日にまにあいません。もしまにあわなければ部隊は兵器がないままでも出港しなければなりません。当時の状況では南方部隊への追送は不可能な状態でした。

昭和二十年には本土決戦態勢となり、兵器の疎開が始まりました。名古屋陸軍兵器補給廠の管理する弾薬は、すべて高蔵寺分廠が保管していましたが、一か所に集積しておいて爆撃されたならば全滅してしまいます。このため石巻東郷地区の山間部で怒部隊が、二十四時間作業で横穴を掘り、これを兵器補給廠が引きつぎ弾薬を格納したのですが、これもまた輸送に大変苦労しました。

飯田線新城駅へ到着した弾薬を洞窟へ運搬するのに、弾薬を木炭車に積むことは禁止されており、農家の牛車を総動員して運搬しましたが、牛では能率があがらず大変困りました。

時を同じくしてドラム缶いりのガソリンがつぎつぎと到着しました。当時のドラム缶は非常に鉄板がうすく新品の缶でも損傷して、ガソリンがもれて到着するものがあります。これではいたしかたなしと自動車会社へガソリンを支給すると話したら、何台もトラックを配車してくれ、滞貨も一掃することが出来ました。それほど自動車会社も燃料には相当困っていたようです。

本土空襲もはげしさをまし、造兵廠の生産能力もち、行政本部から発送証票が来ても造兵廠から兵器が納入されないような事態になりました。帯剣のさやはなくても剣身のみ支給するようになりしました。これでは物量をほこる米軍に勝てるはずはありません。

後日、進駐軍に兵器を引きわたすさいに私が現地を案内しましたが、弾薬が三千屯あるとつたえたら、いまだ日本にこんなに弾薬があったかと驚いておりました。

## 人間万事塞翁が馬

神奈川県 忍 足 諒

「おい、日本の船が来たぞー」

と叫ぶ友の声で、皆一斉に海の方角に目をやった。船腹に日の丸をえがいた船が、ゆっくりと近づいて来る。目をこらすと船首の船名がみえて来る。「雲仙丸」だ。夢にもみた全員待望の日本の船だ。皆こおどりせんばかりに近づく船を凝視する。こんどこそ本場に祖国日本に帰れるぞ。涙で船体が霞んでみえる。私物は没収されると聞いていたので、入宮する時から肌身放さず身につけて来た神社、仏閣のお守札を焼くことにした。抑留後、身体検査のつど、マスコットだと説明すると、

「ダー・ダー」(同意)といってとりあげられなかったおれでしたが、帰国に際し没収されて、不敬なことをされては申しわけないと思ひもやすことに決め、たき火に入れました。燃える火を見つめていると、今までの出来